

巻頭言

コロナ禍で思う —「天、共に在り」

京都ノートルダム女子大学教授 室田 保夫
関西学院大学名誉教授

今年は新型コロナの話題で一色であり、今日のような状況になると想像すらしなかった。春の訪れと共にパンデミックな状況と化し、大学はオンライン講義が主流となり、キャンパスから学生が消えた。非日常にもいらか馴れたが、親しい友人や家族と出会い軽快な会話ができていた過去への郷愁が増し、今は致し方ないものと諦念に至っている状況である。こうした折、世界的な大流行をみたスペイン風邪への歴史的事実が想起され、慌てて内務省衛生局編『流行性感冒』（平凡社）や速水融『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ』（藤原書店）、カミュの『ペスト』等を読みながら、少しは過去を知り今の状況を知ることによって自分なりに安心感を得ようとした。

毎日のメディアによるコロナ感染の状況報告、新聞や雑誌、関係する著作が店頭と並ぶ。人々はマスクと消毒、うがいと半ば強制的に自己管理が身につけてしまう。殆どの方がマスクをかけ言葉少なに店に入り、電車やバスに乗る、これがあたりまえの日常としての風景となっている。そしてコロナは日本社会の色々な分野に多大な影響を及ぼしている。特に感染対策が不十分で経済を動かし人々の交流を活性化すると、感染拡大につながるというジレンマに陥る。

コロナの影響で多くの中小企業を中心にして経営悪化がみられ、時には倒産や休業となり、失業

や雇い止めが多発している。生活苦に追い込まれて自殺者も増え、悲しいニュースも後を絶たない。障害をもっている人たちやネットカフェ等で暮らす人々、女性や社会的にも弱い人々を直撃する。例えば感染リスクが高い高齢者の介護施設に目を転じて、寄り添っていくという介護の基本的な態度は、逆効果として新しい接し方を模索しながら日常生活の援助にあたらざるを得ない。そして施設利用者と家族の面会の機会もままならず、またコミュニティ活動や結束は弱体化し、住民同士の紐帯はさらに希薄になっている。

医療現場の状況はもっと厳しい。特に症状の中等以上の患者、とりわけ重症患者の隔離処置においては緊張感をもって対処しなければならない。ひとたび重症者数が増加し逼迫してくれば、医療崩壊ともなり得る。北米やヨーロッパ諸国の現状をみれば、コロナの状況は想像以上である。医療に携わっている人々が重労働と感染の危機に堪えながら献身的に看護と治療にあたっている。こうした状況に対して、一刻も早く新型コロナの治療薬やワクチンの開発と実用化が望まれている状況である。たしかに今、我々は自身の生存のための手段を考えていくことが必要である。

しかし一方で、このようにコロナ禍は現代社会が抱えている課題を浮き彫りにした。少し視点を変えればコロナ危機こそ変革への好機でもある。

我々はこのパンデミックから何を学び、そしてコロナ禍は我々に何を教えようとするのだろうか。人類とウイルスとの闘いとも言われるが、人類の誕生以来、人間とウイルスは共存してきた。そのウイルスを敵に導きだしたのも人間である。ウイルス学の権威山内一也は21世紀を人間とウイルスの「共存の時代」と表現している。文明という常套文句の影には自然を征服していくという人間のおごりもある。

山内は「二一世紀はエマージングウイルスの時代」（『新版ウイルスと人間』91頁）と喝破している。そして「世界的な人口増加、森林破壊、都市化など、人間の社会活動はたえまない拡大を続けてきた。その結果、野生動物を隠れ家とするウイルスの生活環境に、人間が入り込むことになった。ウイルスが現代社会に侵入しているというよりも、むしろ、人知れず存続してきたウイルスを、現代社会が新たに招き入れているのである。（『ウイルスの世紀』、35頁）とも言う。そして新型コロナウイルスは「二十一世紀がウイルスとの共生の道をさぐる時代に入ったことを、われわれに見せつけているのである」（同、233頁）と指摘する。

ところで2015年9月、国連で200近い国家の合意でもって「持続可能な開発（Sustainable Development Goals）、いわゆる「SDGs」が採択され、全世界は2030年までに取り組んでいくことが決定された。例えば①あらゆる場所のあらゆる形態の貧困を終わらせる、②飢餓を終わらせ、食糧安定保障および栄養改善を実現し、持続可能な農業を促進する、③あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する、といった17に及ぶゴールが設定され、具体的な「ターゲット」や「実施方法」が提起されている（南博他著『SDGs』岩波書店）。非常に高い到達目標ではあるが、現代社会に掲げられた一つの重要な試みである。このコロナの課題はかかるゴールに向けての重要な追い風になるかも知れない。コロ

ナ禍は現在の社会の有り様や人間についての本質的なことを映し出してくれる。人間福祉は「価値」を追究する学問でもある。この価値を社会の中で位置づけていく必要があるのではないか。

アフガニスタンの荒れ地に井戸を掘り、水道を通し、その実践の中から現代文明への本質を指弾した医師中村哲は『天、共に在り』（NHK出版）の中で「今ほど切実に、自然と人間との関係が根底から問い直された時はなかった。決して希望なき時代ではない。大地を離れた人為の業に欺かれず、与えられた恵みを見出す努力が必要な時なのだ。それは、生存をかけた無限のフロンティアでもある」（240頁）、そして「自然から遊離するパベルの塔は倒れる。人も自然の一部である。それは人間内部にもあって生命の営みを律する厳然たる摂理であり、恵みである。科学や経済、医学や農業、あらゆる人の営みが、自然と人、人と人との和解を探る以外、我々が生き延びる道はないであろう。それがまっとうな文明だと信じている」（246頁）と断じている。もう一度、我々は足下にある現代文明とは何かを見てみることも大切だ。人間が弱い存在であること、自然や人との繋がりの中で生きていることを想起すべきである。山本太郎も『感染症と文明—共生への道』（岩波書店）の第1章で「文明は感染症の『ゆりかご』であった」と表現している。人類は文明の名の下で効率良く欲望を満たし、都合良く物質や物で溢れる便利な社会を追究してきた。

文明は常に自然との和解、共生になりたつものであることをウイルスは教えている。コロナ禍は大きな歴史の転換かもしれない。人間の生存の課題、地球の課題として考えていかなければならないのではないか。20年後、50年後、この感染症は「SDGs」を含め如何に評価されているのだろうか。この時代に我々は人間の福祉、幸福の為に何をいかに発信していくかが問われている。中村の言葉「天、共に在り」はコロナ禍の時代においても重い言葉である。